正気の社会

エーリッヒ・フロム
加藤正明・佐瀬隆夫訳

社会思想社刊

加藤正明（かとう・まさあき）
1913年　東京に生まれる
1937年　東京医専卒業
現　在　世界保健機構（WHO）のフェロウとしてアメリカ留学
国立精神衛生研究所・精神衛生部長，医学博士
著訳書　『異常心理』『自殺』『ノイローゼ』『異性ノイローゼ』
F．アレクサンダー『現代の精神分析』等
住　所　東京都杉並区阿佐ケ谷2丁目21番15号

佐瀬隆夫（させ・たかを）
1929年　名古屋に生まれる
1953年　一橋大学卒業　国際キリスト教大学語学研修所卒業
ニュースクール・フォー・ソシアル・リサーチ大学院
（ニューヨーク）にて社会学研究
現　在　日本精神分析学会会員
著訳書　『ニューヨーク』E．ボドネット『問題解決の技術』
住　所　東京都文京区小日向2丁目7番8号

正気の社会
© 1958

昭和33年4月30日　初版第1刷発行
昭和44年5月30日　初版第10刷発行
定価 1,200円

訳　者　加藤正明
佐瀬隆夫
発行者　二宮敏夫

発行所　株式会社　社会思想社
（101）東京都千代田区神田駿河台3－5
電話代表（03）292－2611
振替東京　71812

落丁・乱丁本は直接小社へお送り下さればお取り替えいたします

印刷／猪瀬印刷・製本／黒田製本

日本語版への序

本書はおもに、アメリカの社会的、心理的諸問題をとりあげているかのようにおもわれるが、この印象は正しくない。多くの例がアメリカの生活からとってはあるが、おもなテーマは世界のすべての産業資本主義国家にあてはまるのだ。

人間は、努力の大部分を商品ないし物質の生産と交換に集中することによって、自分じしんを一個の物質に変えてしまったというのがこの書物のテーマである。人間は人間のように行動する機械をつくりだし、かれじしんますます機械のような人間になっている。すなわち、人間は自己から疎外され、みずから体験し創造者としての人間の力を体験するのではなくて、じしんのつくった生産物にぬかづいている。

すべてこれらの結果、人間は、自分が内的な力も確信もなく、強く深く愛する能力をもたないと感じている。この状況のもとで、人間は孤独で、孤立していると感じ、大衆と同調することによって安全感をみいだす。

われわれは、工業生産の偉大な利益を放棄もできなければ、放棄をのぞんでもいないのだから、人間がより多くの生産や消費のための手段になるのではなくて、社会組織の目標となり目的となるように、現代の社会的、政治的組織を変化させることを求めなければならない。

この目的を達成するには、自分がスローガンにあやつられている機械の歯車にならずに、じしんの自由な決定にしたがっているという幻想をいだいている状態から脱して、人間を責任をもって自分の労働に積極的に参加するものにさせるような変化が求められねばならない。

スターリン主義体制も資本主義体制もともにけっきょくは、人間が内的な創意も真の自己ももたずに、物質の生産が目標となり、生産し消費する体制にかたまりつつある。

高度に権力の分散をみとめる人間主義的、民主主義的および共産主義的社会主義がアメリカのみならず、世界の他のすべての国にとっての解決法である。

日本のような国で、哲学的、精神的な面で、産業文明の考えときわめて異なる古い文化の上に、近代資本主義がそのまま接木されるならば、中国、アラブ諸国あるいは、ラテンアメリカ諸国と同様、日本でも近代産業体制をとる過程でその国の伝統の価値あるものをすべて失う機会が多い。産業体制を人間化し、民主主義的社会主義の新体制をつくりだそうとするとき、アジア諸国は、その精神的遺産の多くを新しい真の人間社会でゆたかにみのらせるすばらしい地位にあるとわたくしは信ずる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この目的のためにこの日本語版がいささかなりとも役だてば幸いである。

一九五八年二月一一日

E・フロム

感謝のことば

つぎの出版社のかたがたが、出版物の抜萃の利用を快く許可して下さったことを厚く感謝します。

一九五三年、タイム社に著作権がある、「フォーチュン」誌の一九五三年五月、六月、七月および八月号に掲載された、ウィリアム・H・ホワイト Jr. 著『素通りの客』"The Transients" の抜萃を再録することを認めて下さったニューヨークのフォーチュン社にたいして。

一九五〇年、ハーパー・アンド・ブラザース社に著作権がある、ジョセフ・エー・シュンペーター著『資本主義・社会主義・民主主義』"Capitalism, Socialism and Democracy" およびクレアー・ハチット・ビショップ著『万物は共通』"All Things Common" からの抜萃を転載することを許可して下さったニューヨークのハーパー・アンド・ブラザース社にたいして。

一九四六年、オルダス・ハックスレーに著作権がある、『すばらしい新世界』"The Brave New World" のかれの序文を、転載することを許可して下さった、ニューヨークのハーパー・アンド・ブラザース社とロンドンのチャトー・アンド・ウィンダス社にたいして。

ジェ・エフ・リンカーン著『志気をたかめる管理法』"Incentive Management" からの抜萃を、転載することを許可して下さった、オハイオ州クリーヴランドのリンカーン電気会社にたいして。

アルバート・シュヴァイツアー著『文明の哲学』"The Philosophy of Civilization" からの抜萃を、転載すること許して下さったニューヨーク、マクミラン社およびロンドンのエー・アンド・シー・ブラック会社にたいして。

序　文

本書は、十五年以上もまえに書いた『自由からの逃走』の続篇である。わたくしは、『自由からの逃走』でつぎのことを明かにしようとした。つまり、全体主義の運動は、人類が、現代世界で獲得した自由からのがれたいという根ぶかい渇望に訴えるものであったということ、すなわち、現代人は中世紀の拘束から自由になったものの、知と愛にもとづく意義ある生活をきずきあげるほど自由ではないので、指導者や民族や、国家に服従することにあたらしい安全を求めたということである。

本書『正気の社会』でわたくしは、二十世紀の民主主義における生活も、多くの点で、別の形の、自由からの逃走であることを示そうとこころみた。したがって、疎外という概念で要約されるこの特殊な逃走の分析が本書の主要部分をなしている。

また、『正気の社会』は、別の面で『自由からの逃走』の続篇であり、ある点で『人間における自由』の続篇でもある。両書においては、わたくしは、特殊な心理的メカニズムを、それが主な題目に関係があると思われるかぎり、とりあつかった。すなわち、『自由からの逃走』では、主として、権威主義的性格（サディズム、マゾヒズム等）の問題をとりあつかったし、『人間における自由』では、リビドーの発展というフロイトの図式を、対人関係における性格の発達の図式におきかえることによって、種々の性格の方向づけという考え方を発展させた。『正気の社会』では、わたくしが、「人道主義的精神分析学」と名づけた基礎的概念をさらに体系的に、発展させようとこころみた。初期に発表した、以前からの考え方を省略できないのは、きわめて当然のことだが、わたくしは、それはできるだけ簡明にして、

過去数年間の、わたくしの観察と、思考がもたらした考えの方に、より多くの紙面をさくように努めた。

まえの書物を読んだ読者は、考えのいくぶん変ったところとつながっているところを、たやすく理解し、人道主義的精神分析学の主要なテーゼにすすんで行ってほしい。すなわち、人間の基礎的な情熱は、本能的な欲求に根ざしているのではなくて、人間存在の特殊条件つまり人間以前の時期での初期のつながりを失ったのちに、人間と、自然とのあいだに新しいつながりをみいだそうとする欲求に根ざしている。この点で、わたくしの考えは、根本的に、フロイトの考えと異っているが、それにもかかわらず、わたくしの考えは、フロイトの基本的な発見にもとづいており、さらにフロイトを崇めていた世代の考え方や経験の影響のもとにおしすすめられてきた。しかし、この本で述べるフロイトにたいするはっきりした批判や、暗示的な批判のゆえにこそ、わたくしは、つぎのことをきわめてはっきりと述べておきたいと思う。それは、精神分析学のある種の傾向が発展して、フロイトの体系にみいだされるある種の誤謬を批判していると、それといっしょに、フロイトの学説のもっとも価値のある部分を放棄する危険があるということである。すなわち、かれの科学的方法、かれの進化論的概念、およびかれの無意識の概念、つまり誤った考えの総計というよりも、無意識は真に非合理的な力だということを放棄することになる。さらに、精神分析学がフロイトの思想の他の基本的な特徴、すなわち、常識と世論とを物ともしない勇気を失ってしまうという危険がある。

さいごに、『正気の社会』は、『自由からの逃走』において提出した、純粋に批判的な分析からすすんで、正気の社会をかたちづくるための具体的な提案をしているのである。本書の最終章の主な点は、ここに述べられたどの方法もが、必然的に「正しい」という信念ではなくて、経済的、社会政治的、およ

び文化的諸局面における変化がともなってはじめて社会の進歩が起りうる、という信念なのである。すなわち、ひとつの面に限局された進歩は、ぜんたいの局面の進歩にとって、非常に有害だということである。

わたくしは、この原稿をよみ、建設的な示唆や、批判を行ってくださった多くの友人にたいへんお世話になった。とくにその中のひとりであり、本書執筆中に他界したジョージ・フックスの名をあげておきたい。さいしょ、われわれは、本書を共同して書くはずだったが、かれの病気がながびいたため、この計画は、実行不可能になった。しかし、かれの助力は、重要なものだった。われわれは、長い討論を行ってきたし、とくに、かれは、社会主義の理論にかんして、多くの手紙や、メモをわたくしあてに書きおくってくれたが、それは、わたくしじしんの考えをはっきりさせ、時には、訂正させるのに役だった。わたくしは、本書でかれの名を数回、挙げているだけだが、わたくしがかれに負うところは、このようにとくに名前をとりあげることだけでは、とうていつくし得ないのである。

また、世界保健機構の精神衛生部長、ジー・アール・ハーグリーヴス博士にたいして、アルコール中毒、自殺および殺人にかんする資料をうるにあたって、ご助力いただいたことを感謝したい。

E・F

凡例

一　原著における

1　イタリックは、訳文では傍点（、、）をつけた。以下同じく

2　〝〝は「　」とした。

3　〝，　〝は「《　》」とした。

4　脚注は各パラグラフのあとにつけた。

二　引用文献のうち、邦訳のあるものはその邦訳をのせ、その訳者、発行所名を示すようにつとめた。ただし前後との関係から、訳者が邦訳の表現の一部を変えた個所もある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

日本語版への序……一
感謝のことば……四
原著者序文……五
凡例……八
第一章　われわれは正気か？……一五
第二章　病的な社会とは？……二五
——常態における病理学——
第三章　人間の状況……三七
——人間主義的な精神分析への鍵——
人間の諸欲求……四四
——存在条件から生じた人間の諸欲求——
A　外とのつながりと自己陶酔……四七
B　克服——創造と破壊……五四

C 固着——友愛と近親愛……七七
D 同一感——個人化と集団への一致性……八〇
E 方向づけと信仰の枠組を求める欲求——合理と非合理……八三
第四章 精神の健康と社会……八七
第五章 資本主義社会における人間……九九
社会的性格……一〇〇
資本主義の構造と人間の性格……一〇四
A 十七世紀と十八世紀の資本主義……一〇五
B 十九世紀資本主義……一〇七
C 二十世紀の社会……一一四
I 社会的および経済的変化……一一四
II 性格学的変化……一一三
a 量化、抽象化……一一三
b 疎外……一一四
c 他の種々相……一一六
1 匿名の権威——同調……一一六

2 欲求不満をおこさないやり方……一八九
3 自由連想と自由会話……一九三
4 理性、良心、宗教……一九五
5 労　働……二〇四
6 民 主 主 義……二一
Ⅲ 疎外と精神の健康……二一八
第六章　さまざまの他の診断……二二七
十九世紀の診断……二二八
二十世紀の診断……二四七
第七章　さまざまの解答……二六三
権威主義的偶像崇拝……二六七
超 資 本 主 義……二七一
社 会 主 義……二七七
第八章　正 気 へ の 道……二〇三
一般的な考察……二〇四

経済的変化……三一
A 社会主義の問題点……三一
B 共産主義的社会主義の原理……三七
C 社会心理学的反論……三二
D 動機となる利益と参与……三五
E 実際的な示唆……三六〇
政治的変化……三七
文化的変化……三八二
第九章 要約——結論……三九三
訳者あとがき……四〇五
索引

かれは多くの民の間をさばき
遠いところまで強い国々のために仲裁される
そこでかれはつるぎを打ちかえしてすきとし
そのやりを打ちかえしてかまとし
国は国にむかってつるぎをあげず
ふたたび戦いのことを学ばない
かれはみなそのぶどうの木の下に坐し
そのいちじくの木の下にいる
かれらを恐れさせる者はない
これは万軍の主がその口で語られたことである

ミカ書

生きることほどにもむずかしいわざはない。他の芸術や科学ではいたるところに多くの教師がみいだされる。若いひとびとでさえ、これはこうやって習ったのだから、他人にそれを教えられるのだと信じている。だがひとは一生かかって生きることを学びつづけなければならない。しかも、もっとおどろくべきことに、ひとは一生かかって死ぬことを学ばなければならないのだ。

セネカ

この世界もあの世界もたえず生みつつある。あらゆる原因は母に当り、その結果は子に当る。

この結果が生まれると、それがまた原因となり、おどろくべき結果を生みだす。

こういう原因は何代にもわたっているが、その鎖の環をみつけるには、ひじょうによくかがやく眼が必要だ。

ルミ

物品はたづなをにぎり、人間を支配する。

エマーソン

人類は科学や芸術を生みだすだけの知恵をもっていた。それなのにどうして、正義、友愛および平和の世界がつくりだせないのだろうか。人類はプラトー、ホーマー、シェイクスピア、ユーゴー、ミケランジェロ、ベートーヴェン、パスカル、ニュートンを生みだした。かれらはみな、その天分によって根本的な真理にふれ、宇宙の深奥の精髄にふれただけの、人間の英雄である。ではなぜ、おなじ人類が、生活にもっとも密接し、宇宙と調和した共同体の生活という形態にみちびくことのできる指導者をつくりだしてはいけないのだろうか？

レオン・ブルム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com